

# 解体新書と、付図を描いた小田野直武

藤 本 十四秋

“Kaitai-shinsho”, An Old Famous Book of the Human Anatomy,  
Which Was Translated by Genpaku SUGITA and Illustrated by  
a Formal Soldier in the Akita Group, Naotake ODANO

Toyoaki FUJIMOTO

キーワード：解体新書，杉田玄白，解体図，小田野直武，秋田蘭画

## 概 要

解体新書（1774）は著者の杉田玄白と共によく知られているところであるが、このような解体書では、挿図の占めるウエイトが極めて大きい。解体新書5巻のうち、第5巻が付図で、これを描いたのが小田野直武<sup>おだの なおたけ</sup>という、その時26歳の秋田藩士である。彼が描図担当に至った経緯は運命的で、1773年に秋田藩（藩主・佐竹義敦、号・曙山）が平賀源内を鉱山検分のため招聘した際、宿の襖絵に注目した源内が、その作者・直武の画才を見抜くことになる。これが機縁となり、源内が江戸に引き揚げたその年の暮に、藩主・曙山の計らいもあって、直武は源内のもとに江戸に上り洋風画の修業に入る。このとき既に解体新書本体は出来上がっており、玄白は画師を探していたのである。親交のあった源内が、玄白に直武をその画師として紹介する。出版は翌年の8月であるから、直武は実質6ヶ月余りで木版の元になる図（模写）を仕上げたことになる。彼の画才と熱意が伝わってくる。ところで直武の江戸滞在は5年に亘るが、洋風画習得の収穫は曙山らにも還元し、秋田蘭画と呼ばれる洋風画の一派を形成して、西洋画の先駆けとなる。このような医学史上貴重な翻訳解剖書の出現は、一方で、西洋の学問発展を促し、他方、挿図担当が洋風画を興す言動力となったその美術史上の貢献も見逃すことはできない。

## はじめに

解体新書と著者としての杉田玄白の名は、おおかたの人は両者を対にして直ぐに思い浮かべられると思う。しかし、玄白も書いているが、このような書では図が大きなウエイトを占めており、従って本書では文節毎に図を挿入し、図に符号を付けて文と図が照合できるようにしている、と。その大事な図を描いたのが、さむらい画師・小田野直武で、彼の名も解体新書、杉田玄白らと共に、もう少し世に知らしむべきものと思う。

## 1. 解体新書の翻訳・出版； 運命的な出会いや機縁から

解体新書翻訳の契機やその過程については、玄白晩年の回顧録・蘭学事始（1815）に詳しくまた情熱を以って述べ語られている。出逢いの始めは、明和8年（1771）3月4日に、“江戸千住（北郊）小塚原（刑場）で腑分けの挙あり”，ということで、玄白は前野良沢ら、志を同じくする人たちと共にそれを見学したときに始まる。そのとき、良沢が懐から取り出した本が、玄白のそれと、“同書同版の解剖図、つまりターフェルアナトミアであって、手をたたいて感激した”，と記す。そして実際に自分の目でみる人体内部の様子が、前記オランダ書のそれに一致しているのに感動し、これが日本語への翻訳の強い動機となっている。そのとき不惑の年を迎えていた玄白をして、斯く言わしめている。「苟くも医の業を以って互ひに主君主君に仕うる身にして、その術の基本とすべき吾人の形態の真形を

（平成21年10月16日受理）

岡山医療技術専門学校，元川崎医療短期大学第二看護科

Okayama Institute for the Medical and Technical Science, and formerly, the Second Department of Nursing, Kawasaki College of Allied Health Professions

も知らず、今まで一日一日とこの業を勤め来りしは面目もなき次第なり」。そして、良沢の「善は急げ」という助言もあって、その翌日から良沢の家に集まり、翻訳事業に取り掛かったのである。この意気込みが、翻

訳事業を短期間に成し遂げることに繋がったと思われる。正に、「時」と「人」との出会いの組み合わせを感じる。それらを関連事項を含めて、左の表1にまとめる。

表1 解体新書とその関連

解体新書 (1774. 8月)
<p>杉田玄白(不惑の年) 図；小田野直武(26歳) #</p> <p>前野良澤、中川淳庵、石川玄常、桂川甫周</p> <p>全5巻、うち第5巻は付図：図は元本のほか、五つの書からも引用</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・原著：J.A.Kulmus; Anatomische Tabellen (ドイツ) 1731(第2版)</li> <li>・元本：同オランダ語訳；ターフェル・アナトミア (通称) 1734 ; Gerardus Dichten: Ontleedkundige Tafelen 1734</li> <li>・解体約図 (1773. 1月) 杉田玄白、中川淳庵、図；熊谷儀克</li> </ul> <p>#平賀源内のもとへ 1773. 12月 江戸に上る。源内、直武を画師として、杉田玄白に引き合わせる。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・重訂解体新書 大槻玄澤 (1826)</li> </ul>

表2 第5巻(付図)にある、直武による跋文  
(現代文に書き改め、読みは小川による<sup>6)</sup>)

我が友人 杉田玄白訳する所の解体新書成る。予をして之が図を写さしむ。夫れ紅毛の画や至れる哉。予の如き不佞者は、敢て企ち及ぶ所に非ず。然りと雖もまた図くべからずと云わば、怨み朋友に及ばん。嗚呼、怨みを同袍に買はんよりは、寧ろ臭を千載に流さんか。四方の君子幸いに之を恕せよ。

東羽秋田藩 小田野直武

続けて記すと、解体新書の元本・オランダ訳が刊行されたのは1734年で、これは玄白の生まれ年(1733)にほぼ相当しており、これも機縁というものだろうか、はじめに述べたように、彼が所謂不惑の歳に入ってからこの本と出合った意義は大きい。彼の、時の立場や識見が、この翻訳への執念を駆り立てたものであろう。

さて、図を描いた小田野直武は、このとき26歳になりたての秋田藩士で、彼が江戸へ上ってきたのは1773年暮であるから、このとき既に解体約図(5葉のパンフレット)が出版されており、解体新書も大枠ができていたのである。ここで、直武が直ぐに描画に取り掛かったとしても、彼は、わずか1年足らず(正味半年余)で解体新書の全図を洋画風に仕上げたことになる。その画才が窺われると共に、絵を任された名誉と熱意、そして自信のほどが、付図の跋文(表2)からも伝わってくるのである。

直武と平賀源内との出会いは正に運命的というべきで、項を改めて後述する。

次の図1・左は、杉田玄白(80歳 文化9年)の肖像画で、幕臣・洋風画家・石川大浪による傑作とされる。玄白の自賛のことばが添えられている。

「荏苒たり太平の世、無事 天真\*を保つ。復ここに烟霞改まり、閑かに迎うる八十の春、九幸老人」<sup>9)</sup>。\*天真：天然自然のまま、偽りや飾り気のないさま。

同図右は、解体新書の扉絵で、下の台に天真の字が見える。ここに使われている天真楼というのは玄白の書齋(且つ私塾)につけられている名前である。

この扉絵は、元本のターフェルには無いもので、スペイン生まれのワルエルダ, Juan Valverde de Hamusco の解剖書のものに似ていると言われる。参考までに掲げておく(図3)。直武はこれを模写、少改変したものと思われる。

併せて、小田野直武の肖像画(想像で描かれたもの)も掲げておきたい(図2・左) 図2・右は、後述の平賀源内との出会いを語るための秋田の地図である。後述のその項目で参照されたい。

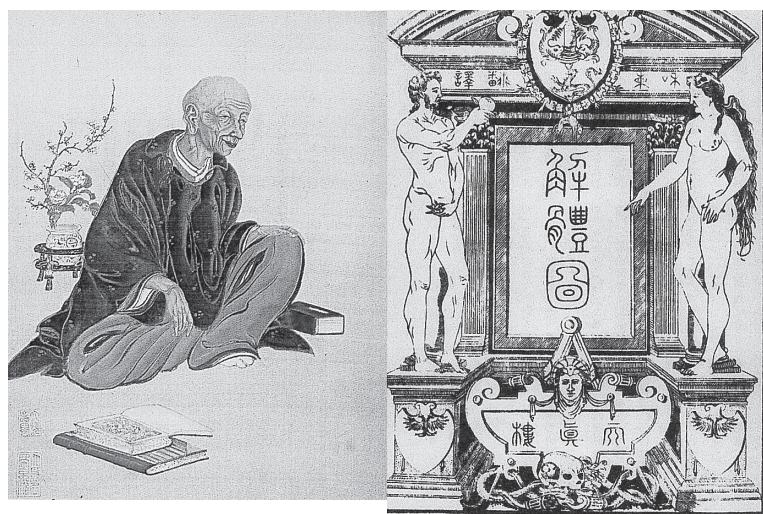


図1 杉田玄白像(日本の名著22)<sup>9)</sup>と、解体新書の扉絵(右)



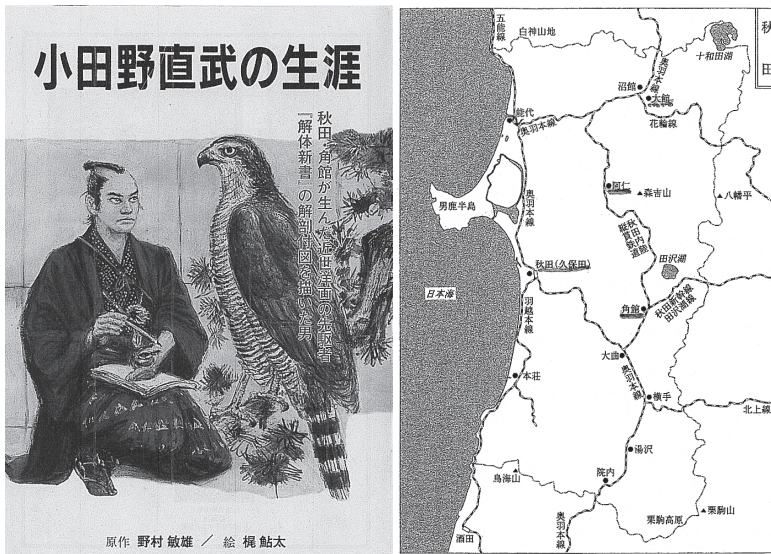


図2 角館歴史村・青柳家所管

(右) 平賀源内・阿仁銅山検分の足取り

## 2. 解体新書の内容、附図の幾らかを紹介

これからは少し解体新書の内容、図を紹介したい。

まず、その冒頭に変に興味を惹かれる箇所があり、表3に示す。

解剖学の習得によって、併せて解剖学的生命観が得られ、人体の解剖では、人生哲学への思索も大切であることを示唆している。

オランダ訳元本の原意と比較してみるとその真意がよく理解できる(表3)。

表3にある、項目3)は、原本と新書、ともに同趣



図3 図の上に、ワルエルダの解剖書のオランダ語訳本。解体新書の扉絵となった原図(写)、とある<sup>11)</sup>。

意である。

解体新書の訳に当たっては、漢方にはない解剖学用語がでてきて、その都度新しい用語を作りながらの作業であった。新書の予告版として出版された解体約図には、その幾らかを“華人の未だ説かざる所の者”として掲げている(図4)。それに従い幾らかを選びだしてみる。

戊；大キリイル 現在の膝のこと、膝の字(国字)は、医範提綱(宇田川玄真, 1805)に初めて現れる。

東；門脉；玄白が作った用語、現在も使われている門脈のこと。

西；ゲール管，ゲールクア：現在の、乳ビ管，乳ビ槽，胸管に当たる。

地；血脉：静脈のこと。

その他、解体新書の神経篇に、**神経**という語が歴史上初めて現れる。玄白は、神気の神と、経脈の経とを合わせて作ったと語っている(和蘭医事問答<sup>13)</sup>)。また、元本にある“**ウェルフセル**”はどうしても分からなかったとしている<sup>7)</sup>。現在の**脳弓**のことである。

引き続き、解体図、即ち、直武の描画になる挿図の幾らかを挙げ、参考までにクルムスの原本の該当部分(オリジナル)を、比較の意味を含めて掲げてみる。これを見ると、直武の図が原図に忠実に、陰影もつけてよく模写されていると思う。図のタッチ、技法にも注目したい。

図5は、前記の原本の一部であるが、以下、これに該当する解体新書の挿図(直武描くところの)を、図6, 7, に載せる(酒井シヅ：現代語、解体新書<sup>7)</sup>から)。但し、図6右枠の左下の図は、ブランカル

表3 解体家の心得—原文との比較

### 解体新書 巻の一

### 解体大意 第一

#### ・ 解体新書の訳— 解体家の重んずる所の者に四つあり

- 1) 肢体を知るにあり。
- 2) 内景を知るにあり。
- 3) 病と死との因る所を知るにあり。
- 4) その体の腐朽するに至るを歴視し、而る後にその全を知るにあり。

#### ・ 原本記述の意味— 解剖の益と目的

- 1) 巧妙にできている肉体から造物主の智を認識すること。
- 2) 身体に生来備わった性質を究めること。
- 4) 我々の身体の非常にもらい、壊れ易い構造から、無と死すべき運命を一層よく想い起こすこと。



図からの、左枠上の骨格図は、カスパルの解体図からの、引用である（一部は、他書のものも使っている；右上に区別する符号がついている。表1, 4行目参照）。

### 3. 小田野直武と平賀源内との出会い

小田野直武が解体新書の挿図を手がけることになったのは、既述のように平賀源内との出会いから始まるのだが、この出会いは正に運命的であったと言えるだろう。直武が属する秋田藩（藩主、佐竹義敦、号・曙山）では、財政立て直しのため、1773年に鉾山師の平賀源内を招聘して（技術者、吉田理兵衛を伴う）、領内の阿仁銅山の検分・増産を計るために調査を依頼した

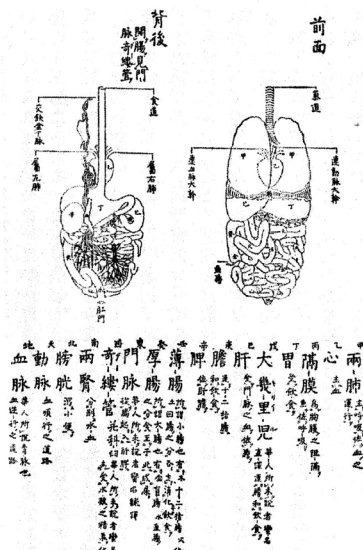


図4 解体約図から

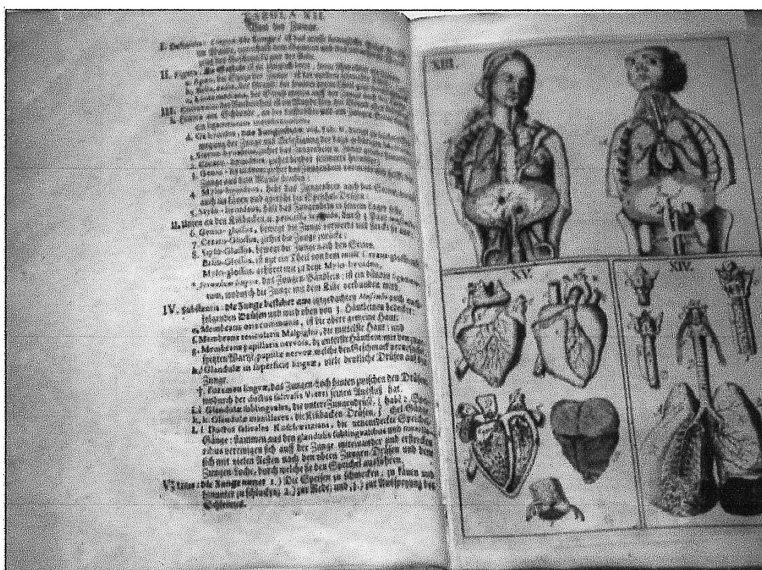


図5 クルムスの解剖図表<sup>5)</sup>から

（以下、図2右の地図を参照）。途中、支藩の角館<sup>かくのだけ</sup>に立ち寄り、御用商人・五井屋孫左衛門宅を宿にする。その際、直武の描いた精緻で巧みな襖絵に目を留めた源内が、直武を呼び寄せる。源内は直武に鏡餅を真上から見た絵を描いてみよ、という<sup>11)</sup>。直武は多分丸（マル）を二つ描いたのであろうか。そこで源内は西洋画の基礎である陰影、遠近の技法を教えたと言われる。藩主の曙山と共に日本画を習得していた直武であるが、ここで、西洋画法開眼への運命的な出会いを得たのである。その後、源内は阿仁銅山の検分に向かうのであるが、直武も道中を共にして、西洋画技法を学んでいたと思われる。

さて、検分・調査を終えた源内は、その年、1773年10月に江戸に引き揚げる。このあとがまた、一つのドラマをつくることになる。藩主の曙山は、直武に銅山方産物吟味役という職を与えて、源内のもとへ、江戸出張を命ずるのである。そして直武は、その年の暮れに江戸に上る。その内実は、藩主は直武に西洋画の習得のため、現代風に言えば、内地留学をさせたのであろう。曙山という号が示すように、藩主も絵を良くし、後述の秋田蘭画期を築くことになる（表4）。

さて、このようにして江戸に上った直武には、はじめに述べたように、直ぐに解体新書の描画の担当が待ち受けていたのである。そして、直武の江戸滞在は5年に亘るが、その間、江戸での洋画習得の収穫を藩主等に還元し、秋田蘭画の成立に貢献することになる。

### 4. 秋田蘭画（近世洋風画の先駆）

秋田蘭画 — 美術史上、日本における西洋画の先駆で、一部既述のように江戸時代後期に秋田藩から興った所謂オランダ絵・洋風画を意味する。

秋田藩城主の佐竹義敦（曙山）が画をよくし、また角館支藩の佐竹義躬も絵の愛好家で、そこに小田野直武という画才に優れた侍がいて、彼が江戸滞在5年の間に習得した収穫（西洋画に関する知識、技法—陰影法、透視遠近法、写実）を、藩主や城代等に還元し、そこに藩士の田代忠国も加わって互いに磨きあい、秋田系洋風画と呼ばれる秋田蘭画の一時期を形成することになる。因みに、曙山は78年に、日本で最初の西洋画論、「画法綱領」と「画図理解」を著しているが、実

質的なリーダーは小田野直武であった。なお、彼が近代美術史上に名を顯すことになったのは、同じ角館出身の日本画家、平福百穂<sup>ひやくすい</sup>の寄与が大きい<sup>12)</sup>。

ここで秋田派洋風画の代表作を掲げておきたい(図8)。

左は、小田野直武筆の、「不忍池図」、右は、佐竹曙山筆の、「湖山風景図」で、もともと彼らは狩野派の日本画を学んだのであるが、ここに挙げた画は、洋画技法を加えて立派な洋風画に仕上がっている。

## 5. 直武，江戸から角館に帰るも一

さて直武は、江戸滞在5年の初めに解体新書の付図

を描くが、更なる後2年の途中に突然、藩の上司から遠慮謹慎を命ぜられて角館に帰国する。謹慎の理由もはっきりしないまま、また幾許もなく、ここ角館で謎の死を遂げるのである。1780年5月、数えの32歳のときである。翌日藩主の赦免状が届いたということであるが、画才豊かな、将来性のある惜しい人を失ったものである。

しかも、その5年後に、藩主の義敦(数え年で直武の一つ上)も世を去り、その後は角館の城代、佐竹義躬や藩士の田代忠国によって細々と続けられるも、衰退は避けられず、秋田蘭画の時代も、19世紀の初頭にはその歴史的生命を閉じるのである。

秋田系洋風画の流れは、このあと、江戸の司馬江漢に引き継がれて<sup>9)</sup>、江戸系洋風画に移行していくことになる。

追補しておく、直武に関する資料は、角館歴史村・青柳家が所管している(図9参照)、なお、直武の墓が角館の松庵寺にある。

次の図9は、前記青柳家内にある直武の胸像で(彼の実像は残されていないので、これは想像の姿)、その右奥の横長掲示は、直武の生涯を絵にしたもので(文献<sup>11)</sup>に挙げた「小田野直武の生涯」に使われた原図、前掲・図2はその表紙)、それらを展示している。

## むすび

ところで、小田野直武の生涯は夭折と言われる程に短いものであったが、解体新書の挿図担当者として名を残し、他方、洋風画の先駆・秋田蘭画の祖として美術史上に名を刻すことになる。併し、彼が世に出たの

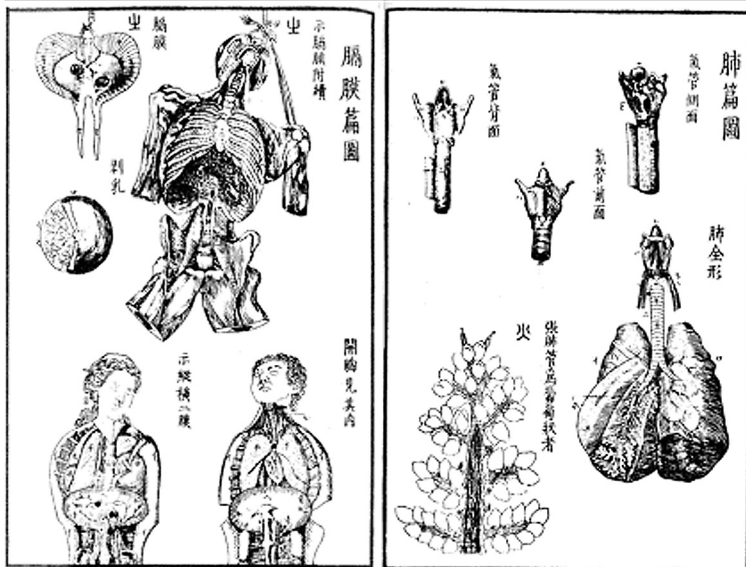


図6 直武筆の解体新書の図の一部<sup>7)</sup>

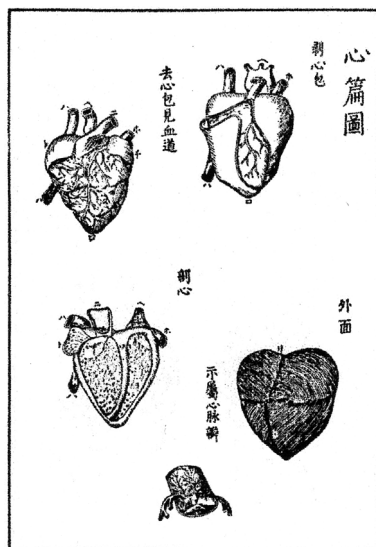


図7 解体新書の図から<sup>7)</sup>

表4 直武と秋田蘭画

## 秋田蘭画(西洋画の先駆)

- ・ 佐竹曙山(義敦) — 秋田藩主
- ・ 佐竹義躬一角館(かくのだて)城代(佐竹北家)
- ・ 小田野直武一角館給人(秋田藩士)  
(平賀源内から学ぶ)
- ・ 田代忠国 — (藩士)

文献: 佐竹曙山 成瀬不二雄・著 ミネルヴァ書房(2004)

秋田の画人 秋田魁新報社文化部・著(昭・39)

復刻版 秋田県史 文芸・教学編 秋田県編(昭・53)



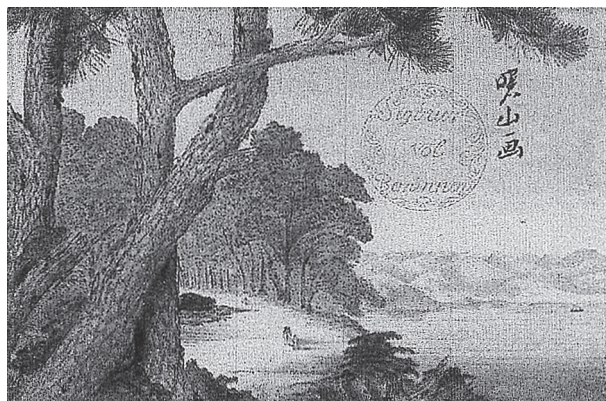


図8 小田野直武「不忍池図」；秋田県立近代美術館蔵、と（右）佐竹曙山「湖山風景図」；秋田市立千秋美術館蔵



図9 角館歴史村・青柳家にある小田野直武像  
(写真提供：野村 茂・熊本大学名誉教授)

は、ずっと後になって、平福百穂（前出）がその編著「日本洋画之曙光」（岩波書店、昭和5）の中で「不忍池図」を（当時では珍しいカラーで）紹介したのが契機となっている<sup>16)</sup>。これから、直武に関する研究が大いに進み、今日的評価を得るに至ったのである。

### 引用・参考一文献・資料

- 1) 杉田玄白、中川淳庵：解体約図、1773、復刻版。
- 2) 杉田玄白：解体新書、1774、復刻版（講談社、1973）。
- 3) 大槻玄沢：重訂解体新書、1826。
- 4) 宇田川玄真：医範提綱、風雲堂蔵版、青藜閣、1805。
- 5) Kulmus JA：Anatomische Tabellen, 1725, ゲッティンゲン医学古典文庫収納、倉敷：倉敷中央病院。
- 6) 小川鼎三、酒井シヅ：解体新書、日本思想体系65, 洋学下、

東京：岩波書店、1972。

- 7) 酒井シヅ：全現代語訳 解体新書、講談社学術文庫、東京：講談社、1998。
- 8) 三枝博音：日本科学古典全書8（復刻版3）解体新書、東京：朝日新聞社、1978。
- 9) 芳賀 徹：杉田玄白、平賀源内、司馬江漢、日本の名著22、東京：中央公論新社、昭和46
- 10) 杉田玄白：蘭学事始、1815；同・現代語版、緒方富雄、岩波文庫、1959。
- 11) 野村敏雄、梶 鮎太：小田野直武の生涯、東京：漢江堂、1995。（角館歴史村・青柳家所管）
- 12) 成瀬不二雄：佐竹曙山、ミネルヴァ日本評伝選、京都：ミネルヴァ書房、2004（前出、秋田蘭画）
- 13) 建部清庵、杉田玄白：和蘭医事問答、編/杉田 勤、1805。（日本の名著22による）。
- 14) 小川鼎三：医学の歴史、中公新書、東京：中央公論新社、昭和39
- 15) 日本学士院・明治前日本科学史刊行会：明治前日本医学史、日本学術振興会、1955—1964。
- 16) 鷺尾 厚：復刻・解体新書と小田野直武、秋田：無明舎出版、2006。

**備考**：本稿は、第114回日本解剖学会全国学術集会（2009、岡山）、サテライト集会「サロングナトミー」で発表・講演したものを、縮小改編したものである。

**謝辞**：小田野直武、秋田蘭画に関しては、大泉健之助・秋田県立大館鳳鳴高等学校、前教諭から文献・資料（p 11）の提供を受け、野村 茂・熊本大学名誉教授から助言と写真（図9）の提供を受けた。また入稿直前に、山本文志・秋田県立近代美術館学芸主事から小田野直武に纏わる論議に接した。機会があれば生かしたいと思う。以上、茲に記して謝意を表する。